浮世絵
体詩集
心乃清琴

心の緒琴 第一集

挿畫　久保田米齋筆
水の音づれ　湖處子題歌
睢陽城　宮崎湖處子
獨歩吟　大町桂月
時　國木田哲夫
花すみれ　武島羽衣
英雄の事業　河井醉茗
仙堂漫吟　桐生悠々
追懷　石橋曉夢
緩絃急調　河内魚ぬの
失戀者の悲歌　宮崎羊兒
錄々集　愚仙堂主人
漫吟集　瀧澤久馬雄
春山枯木　羊子
小流絹々　石橋子明
俳句　重松明水
雜錄數件　正岡子規撰

發行所　本郷區元富士町二番地　三友社

心の緒琴 第一集

挿畫　久保田米齋筆
水の音づれ　湖處子題歌
睢陽城　宮崎湖處子
獨歩吟　大町桂月
時　國木田哲夫
花すみれ　武島羽衣
英雄の事業　河井醉茗
仙堂漫吟　桐生悠々
追懷　石橋曉夢
緩絃急調　河内魚ぬの
失戀者の悲歌　宮崎羊兒
錄々集　愚仙堂主人
漫吟集　瀧澤久馬雄
春山枯木　羊子
小流絹々　石橋子明
俳句　重松明水
雜錄數件　正岡子規撰

發行所　本郷區元富士町二番地　三友社

發行所　東京麹町富士見町一番地　三友社

心の緒琴

弔旅人 并序

今年二月、予杉田に梅を月夜に看むと、旅舍吾妻屋に在つて、暮るゝを遲ちつゝ、二階の椽を歩めゐる際、突然壯年の一外客の褞袍を衣たるが、人なく思ひし隣室より出で來つて、予に、覺つかなき日本語にて、君は英語を操るかと問ふ。予は英語の會話に慣はざるが故を以て、知不らずと對へぬ。爾らば佛語は、獨逸語はと問ふ。予二たびとも頭を掉りたり。渠はいたく望を喪ひたるものゝ如く、且らく予が面を瞻りたりき、予は心中且つ慚ぢ、且つ笑止に勝ねざりしかども、出づべき道を知らざりしかば、徒其如くして置きぬ。後寒暄に就きて二三語を交へしまゝ、予は吾が室に退きぬ。

此事の猶ほ予が記臆に鮮かなる三月十日、府下の諸新聞紙は同じく旅舍に滯在したりし、一墺國人の縊死を傳ふ。往ぬる夜、

家婢より聞きたる所と思ひ合すに、的と同一人なるを識れり。
渠は此の世界に一個糊口の地位を得べく、父母の邦を去りて
遠く我が横濱に來り、然るべき商館毎に其願を告げむき、此
地に來つて日に日に命を待ちつゝありしに、既に月餘を過ぎ
たれど猶ほ喚ばれざりしかば、落心落寞、思ひ窮りて遂に此
悲しむべき手段に出て、自ら天命を割斷したらしと、予は之
を聞て傷心禁ぜず、之を思ふて悲に勝へず、因て之を弔ふ。

宮崎湖處子

杉田の里の旅やどり
一夜はかりの縁なれと
君ゆきたりと聞ときは
傷ましらめやわか心

身すぎの業をはる〳〵と
もとめに來つる効なくて

君は憂世を厭へりと
傳ふる言はまことかな。

果してさらは何如許、
君は淋しくおはしけむ。
しらぬ旅にて惟一人、
何如に淋しくおはしけむ。

まさきくあれと家卿に、
子を思ふ親もおはすらむ。
嬉しきたより待わぶる、
妹なる人もおはすらむ。

旅人なりし君がため、
我　泣かすは誰泣かむ。

免したまへやよ其をりの
心なき予かもてなしを

秋風

耐へぬあつさをうたゝ寢に、
しはし忘るゝ文まくら。
夢路のはしを吹さます、
風はまさしく秋の風。

春はすれてくらしけり、
夏はねむりに盡しけり。
さふて思へと皆人を、
起すは秋の風の音。

睢陽城

大町桂月

大地をまきて　おしよする
安祿山の　はたかせに、
二十四郡は　なびけども、
なびかぬ義士の　鐵石心。
張巡許遠が　たてこもる、
心もかたき　睢陽城。
雲霞のごとき　大軍を、
とゝめさゝへて　守れるは、
怒濤さかまく　うなばらに、
いはほの立つが　おとくなり。

城にこもれる　つれ〴〵の
睡氣さましに　たちいでゝ、
當るがまゝに　薙ぎたふす
獅子奮迅の　いきほひに、
刃向ふ敵は　なけれども、
聲援もなき　はなれ城、
兵士はおほく　討死し、
糧食もはや　つきにけり。

（霽雲歸り來る）

張巡『よくこそ無事に、霽雲どの。』
許遠『進明へのつかひ　大儀なり
万春『かなたの答は　いかにぞや。』
霽雲『まづひと通り　聞きたまへ。』

羊のむれに　おほかみの。

躍り入りたる　おとくにて、
忠義に凝りし　たゞからの
つゞかむ限り　きりまはり
はらふも強き　太刀風に、
ばら〳〵ばつと　木の葉武者、
にぐるを追ふて　一方の
血路をひらき　やうやくに、
進明の陣に　つきにけり。

雲『そも睢陽の　要害は
江淮第一と　聞えたり。
かの城もしも　落ちもせば、
賊はます〳〵　時を得て
天下にひろく　跋扈せむ。
さるに糧食　はやつきて、

城はいよ〳〵　危きに、
一臂の力　そへてんや。』
一日もはやく　援はむと、
われも心は　はやれども、
兵備は未だ　とゝのはず、
いま暫くは　待たれよと、
言葉たくみに　濁らせて、
われをば長く　とゞめむと、
酒宴に添ふる　いと竹の、
ふし面白く　もてなせり。

雲『城中すでに　食つきて、
ひと月あまり　人々は、
米ひとつぶも　口にせず、
木の皮のみを　食へるに、

われいまひとり　美酒に醉ひ、
佳肴にあくに　忍びんや。
よしや口には　食ふとも、
いかで咽に　くだるべき。
御身は食まずや　唐の祿。
御身は受けずや　唐の恩。
さても義を見て　なさゞるは、
これ勇なきの　匹夫ぞや。
御身強兵を　もちながら、
賊にくみせず　官軍に
力あはずる　こともなく、
手を袖にして　たゆたふは、
忠をわきまへ　義を知れる
人の所爲には　あらぬなり。』

慨然として　たちあがり
進明をきつと　にらみつゝ、
やつと呼ばゝる　ひと聲に
指をくはへて　噛みおとし、
口にふくめる　鮮血を
空にむかひて　吐き出せば、
堂一面に　くれなゐの
さ霧ぞさつと　立ちのぼる。

雲『われは使命を　身におびて
かなたに行きし　甲斐もなく、
使者の一分　たゝぬなり。
もとより惜しき　身ならねど、
賊の亡びむ　時までは
なほすてがたき　このからだ。

運命つきむ　わかつきは、
公等とこゝに　もろともに
城をまくらに　死なばやと、
斷ちたる指を　とゞめ置きて
恥をつゝみて　歸り來ぬ。』

花も實もある　ものゝふの
心のそこを　くみわけて、
こぼす涙や　そでの雨
一座はしばし　聲もなし。

遠『運命こゝに　きはまりぬ。
今は人をば　賴むまじ。
公等と共に　この城に、
武士のかばねを　さらしてむ。』

巡『さるにてもかく　餓えはてゝは、
太刀をふるはむ　よしもなし。
今日はからずも　肉を得ぬ。
いざ近寄りて　もろともに
食ひたまへや、わくまでも。』
春『こは近頃の　珍味なり、
そも如何にして　得たまひし。』
巡『何をかくさむ　これはこれ
我が亡妻の　体肉なり。』
雲『夫人の肉をや、こはなむと』
巡『公等驚く　ことなかれ。
妻がいまはの　こゝろざし
かたりいだすを　聞きたまへ。』
言ひ甲斐もなき　女子の身の

御國につくす　術もなく
死ぬに死なれぬ　このからだ、
むなしく野邊に　くちむより、
せめて忠義の　ますらをの
うえたる腹を　こやしなば
數にもたらぬ　賤が身の
世にありがたき　ほまれなり。
巡『あはれ公等が　この月日
食乏しきも　かへりみず、
たゞひと筋に　忠勇の
道をまもれる　心根は、
わが肌さきて　もてなすも、
なほ足らざるを　覺ゆるに、
いまその餓を　よそにして、

妻のいのちを　惜まむや。』
食ひたまへと　すゝむれど、
答ふるものは　絶えてなく、
鬼を欺く　ますらをの
目にも涙の　ひと時雨
袂をしぼる　ばかりなり。

巡『さらば公等は　わが盡す
好意を無にし　たまふかや。』
遠『かく言はるれば　是非もなし、
烈女の肉を　賞味せむ。』
春『烈女の肉を　賞味せむ。』
雲『われもろの肉　賞味せむ。』

一時は餓を　しのげども、

いかでか長く　つゞくべき。
うたれ〳〵て　生き殘る
決死の勇士　四百人、
國家のために　身をつくす
心ばかりは　いさめども、
無殘や餓に　病みはてゝ、
今は手足も　たゝぬなり。』

（兵士入り來る）

兵士『覺悟めされよ、賊兵は、
はや城門に　押入りぬ。』
巡『いざや最期の　軍せむ。
用意はよきか　許遠どの。』
遠『嗚呼殘念や　腰たゝず。』
巡『そなたは如何に、霽雲どの。』
雲『無念やわれも　腰たゝず。』

巡『万春どのは　如何にや。』
われも無念や、腰たゝず。』

張巡ひとり　立ちあがり
進むとすれど　よろ〳〵と
たぢろく足を　さゝへかね、
つるぎを杖に　とゞまりて、
無念の涙　はら〳〵と
西に向ひて　伏し拜み、

巡『臣張巡が　運拙く
力もいまは　つきはてぬ。
生きて陛下の　大恩に
むくいまつれる　事もせず、
むなしく露と　消ゆる身の

いまはの一念、願くは、
鬼ともなりて　思ふまゝ
はらひつくさむ　逆賊を。』

（賊兵亂入して諸士を捕ふ）

死ぬる今はも　色かへず
まなじり裂けて　血を流し、
賊をのゝしりて　いさぎよく
嵐にちるや　花ふぶき
かをりも深き　双廟に、
物のあはれを　とゞめけり。

○

獨歩吟

國木田哲夫

絶望

（去年の夢）

さみだれさびし獨りして
ものを思へばはてもなし
あはれとて泣きしい夢の心地して
にくしとも恨むは今のうつゝなる

行末はいかにもあれ
鬼よ去れ、絶望の鬼
燃えつゝ氷る心地する

今の我身をしばしだに
鬼よ去れ、絶望の鬼
こしかたの夢さめはてぬ
ゆくすえの光だもみず
こがし吹くとこやみの空
星落ちてゆくえを知らず
わが魂いづこに迷ふ

はてなき海

月の光にさそはれて
大海原をだゞよはん
とこよの岸は何處ぞや
そよぐ潮風こゝろせよ
はてなき海と思ひてし

いにしへ人はさちなりき
雲井はるかに見わたせば
波のかなたははてもなし

わが帆ゆたかに孕みたり
月はさやかにてらすなり
そよぐ潮風こゝろせよ
とこよの岸はいづこぞや

波に碎くる月影は
常世に通ふ路なるか
月に漂ふわが舟は
空に浮べる雲なるか

空や海なる雲や空

吾や月なる月や吾
われは常世の民にして
常世は今のうつゝなる

わが帆ゆたかに孕みけり
月はさやかに照らすなり
常世の岸も程ちかし
そよぐ潮風こゝろせよ

久方の空

限りなき空仰きつゝ
とこしへの望かたらひし
君がまなさじ忘れねば
物の思に堪えかねて
ひとり眺むる久方の

天のはる〳〵戀しけれ
間近に君はいませども

月

羊兒

み空をわたる小夜風に
浮べる雲のゆきかへり
晴れては曇る月かけの
なほも浮世をてらすなり

夕ぐれ

曉夢

夕ぐれしづけき野にいで〵
芝生の上に身をなけつ
浮世はなれしわが耳に
千里はるかになく鴉

時

武島羽衣

高亮しる天にたゞよへる
とよはた雲に打のりて、
暴風の馬を驅る「時」は、
今しもあゆみとゞめつ〵、
したなる地に打むかひ、
聲もさやかにとひけるは、
「やよや諸びとよなれはしも、
われを何とか思ひたる」
世のうきふしにしはじみし

むかしのあとやもろ眉に、
霜をのせたるおひびとは、
やをらそなたを打あふぎ、
「時よいましは世の人の
すくせあやなすうみ糸ぞ。
身をかざるべき布綾も、
汝を織る術によればなり。
むかしを悔ゆるかひもなき
今はのきはの床のべに、
衰へはてしみやびとは、
くるしき息のそのしたに、
「あゝ失へり、失へり、
時はいましを失へり。
なれはまことにあめつちの

うづたからにてありけるよ。」
ひくさの庭の荒駒の
きほひてうせしますらをが、
名のみは朽ちぬおくつまや
下よりかよふ聲きけば、
「あはれ聞けかしやよ時よ、
かくうもれぬる日れが身に、
いま刈りつめる名の種は
なれの植えけるものなりし。」
「げになれこそは命なれ。
身に堪へざりし悲みも、
時たつまゝにいつしかと、
なぐさむ折のある見れば」。
なき夫戀ふるたゞやめが、

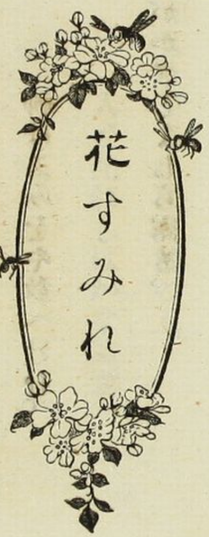
絶えせぬなげきしかすがに、
かくいひつゝも夕ぐれの
花さく庭を見出しぬ。

岩がきこもる松風に、
心の水をすましつゝ、
苔をまとへる山ぶしは、
世にもたふときこわねもて、
「世にとゞろきし時めきも、
今はいづこにあとかある。
思へばなれば人なみの
功名富貴の墓場なり。」
「世のいつはりもまさおとも、
年の光りにてらしなば、

空ゆく月のまさやかに、
分れぬことのあるべしや。
思へばなれは鏡なり、
思へばなれは鏡なり。」
文よむ窓の歌びとは、
とばかりかくもつぶやきぬ。

尾上の松の老木より、
ふもとの野邊の小草まで、
「わがたちちねよわが「時よ、
君が乳ぶさのみめぐみに、
末とふかりし二葉より、
かくも木高くなりにけり。」
ことゝふさまもうれしげに、
みなひとつにぞ答へける。

いとゑましげに聞きゐたる
「時」はけはひもおごそかに
「やよ現し世のもろびとよ
我は常住（イターニチー）の愛子（まなご）なり。
われはわりけりわれはわり、
されどもわれは在らざらん。」
かくいひすてゝたちまちに、
空つきわけてきえにけり。



花すみれ

河井醉茗

なれし庵をわとにみて、
心ほそくもわれ行くを、
なれも泣かずやはな菫。

破れし垣根に寄添ひて、
語るも問ふも今日迄ぞ、
さらばよ菫われゆかむ。

行むと言ふを汝はしも、
笑もてわれを止めつゝ

なほも思をまどわすか。

生ひ出し折も知らざらむ、
はてゆく後も知らざらむ、
知らねど清き色は持つ。

おほしたてゝし人もなく、
おのづからなる春風に、
いつかは花もふくらみつ。

ちりさへさえぬ面影の、
清きをめでし汝にのみ、
神はゑみをや敎へけむ。

汝がかざしよしら露も、

なみだとかはる柚の上
人と生れしはかなさよ。

うつろひ易き世の中に、
つれなくゆくも止るも、
變らであるはいつ迄ぞ。

荒しいほろりに殘るとも、
ゆかりの色のわせゆくを、
愍むひとはなかるらむ。

さとらば頓て汝が身の、
假の榮えをふりすてゝ、
世をはなれずやはな薑。

立より見れば一しほに、

花のゑまひのたはやかに、
世を厭はしき色もなし。

世は我のみのよならぬを、
せまき心にあやまりて、
手折ば仇となりぬらむ。

別れの笑をそのまゝに、
ながため袖は守るらむ。
さらばよ菫さきくあれ。

仙堂漫吟

石橋曉夢

思ふ　まゝ

我戀止むは何時ならむ。
思ひ止みぬと思ひつゝ、
つゞかぬ事を思ひ寐の、
床にも君を夢みけり。

我戀止むは何時ならむ。
忘れはてむと願ひつゝ、
折にふれては人知れず、
わが戀なれと祈るなり。

あゝ我戀止むは何時ならむ。
君とひとつになるまでは、
思ひ止みなむよしもなく。
はかなくならむ時までぞ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

はしたなき身と笑はれつ、
なほこりずまに君にしも、
命をかけて戀ふる身は、
悲しかりけり昨日今日。

思ひ餘りし言の葉の、
つもりて山となるまでも、
君にきこゆるむよしもなく。

ひとりさびしく嘆くなり。

なさけも深き君なれば、
いつか我身のこゝろざし
のこさずきゝて給へかし。
さらばなやみも晴れやせむ。

われも男の子ぞいつ迄か、
戀の道のみたどるべき。
君がためとし知るならば、
思ひたつべしこの戀を。

慰歌

末になりぬと世の中を、
たゞにかこちて在らむには、

あたら男の子のいのちをも、
吹き消しやせむ夏の風。

世をばなげきていたづらに、
悲しく日をばおくりなば、
たけき男の子の身軀にも、
やまひの神の住みやせむ。

あれ見給ひねともし火の、
風のまに〳〵吹かれつゝ、
おぼつかなげの光にて
なほ暗の夜をてらすなり。

英雄の事業

桐生悠々

颱風颯と、見るからに、
樹を拔き、家を蹴倒して、
猛獸鷙鳥の、夢破る。

とばかりありて月は出ぬ。
見渡す花野、幾千里。
物の影なく、寂又莫。

入相

都の塵に、衣を拂ひ、
逃げ來し濱に、足を洗へば、
村の寺々、入相の鐘。

うき人

燃にたつ胸を、撫りつゝ、
庭に下りたち、イめば、
鳴く虫の音を、御聲と、
瞬く星を、おん身と、
見るとはなしに、見られけり。
聞くとはなしに、聞かれけり。
死ぬる思を、くみもせで、
すがる袂を、振り拂ひ、
あだしをみなの跡追ひし、
つれなき人と、知りてだに。

秋の聲

はていかにせん、床の間に、
活けたる花は、散りてけり、
過ぎし逢夜に、懷かしき、
君の手づから活けましゝ。
其折、笑ひてのたまはく、
この花、咲きて散らんまで、
われ訪ひ來ずば、今宵より。
永き別れと、知れかしと、
戯なるか、眞かも、
思ひわかたず、日は經りて、
花は香も、いと高く、
唯おかしげに、咲き出でぬ。
あはれ、この花いつまでも、

咲きて散るなと、祈りにし、
そのかひもなく、徒らに、
散り初めにける今宵かな。
うれし、門には靴音の、
止りし如き氣勢すよ。
胸躍らせて迎ふれば、
更け行く空に月もなく、
垣根に、虫の鳴きつれて、
いづこともなく、秋の聲。

緩絃急調

宮崎羊兒

(有所感)

すがく調のつたなくて
人の耳にはいらずとも
誠をこめし琴の音の
せめては通へあまつ空

仰くみそらの高くして
雲にかゝるかあま琴の
はかなき眼には見えずとも

響かばはらへわが思ひ

見よや黒雲くるひたち
　嵐は空にほゆるなり
熱き血潮はわきかへり
　あゝ我心躍るかな

いざゝらは
　たえなは絶えよ
　　玉の緒の
つゞかん迄を
　　響け我琴

（戀の夢）

寢覺つゝ

戀しき君か名を呼べは
曉の
　雲に消え入る鐘の聲

彩雲に
　戀しき君か影追へば
墨染の
　夕の空に星ひとつ

あはれ〳〵
　世は夢かそも
　　夢の世に
　重ねて見るや
　　戀の夢

（鈴虫によする哀歌）

かよはき聲を振りたて〻
　闇の夜すがらす〻虫の
啼きてあかすは誰故ぞ
　誠をわれにかたれかし

よしや思はかはるとも
　なさけは我もしるものを
ながまおこゝろを聞んとき
　そゝがざらめやこの涙

深き契のあればこそ
　あれし離根をしたひ來て
音にもなくなれ其聲を

　いかてあだには聞かるべき

思ひをかけし其人は
　戀を瓦となしはてつ
あはれとばかりくみとりし
　涙や何の露なりし

虛僞の風世をふきて
　人のこゝろは荒にけり
闇黑にわぶる汝をこそ
　あはれと思へしみ〳〵と

獨りわびねの友として
　幾よまでもと思へども
秋や夜さむになりぬらし
　夜毎に細るなが聲よ

ひたはり知らぬ夜嵐の
時雨さそはゞいかにせむ
なさけの露も冷えはてゝ
霜と結はゞいかにせむ

あゝ其時よ汝はしも
泣かん力もつきはてゝ
あつき涙のねやたえむ

あゝ其時よ我はしも
音にこそたてねわきかへる
涙そゝかむなが爲に

深夜逍遙

星の空　雲晴れて、

風寒し　天の河。
草の原　秋たけて。
露深し　虫の聲、
うは玉の
闇の林にわけ入りて、
莫哀を
一聲高く嘯けは
七夕の戀の涙か
山姫のなさけの露か
はら〳〵と散りくる雫
袖に玉きえ
腸にしむ

(別離)

いつまでもとは思へとも

いつかは盡ひこの名殘
我手を握れあはれ君
さらばこれより別るへし

別にのそみ何一つ
贈らむものもなけれども
わか戀人のその爲に
淺茅が原にわけ入りつ
露の軍に袖ぬれて
辛くも折りしさゆり花
ひともと君にさゝげてん
あはれと君もうけよかし

追懷

河内魚ぬの

春の野邊にてわが妹と、
若葉つみつゝ歌ひつゝ、
いともたのしく遊びてし、
おもひいでこそ殘りけり。

人の命は露のおと、
朝を待たで消ゆるとも、
若葉つみたる追懷は、
極めなきわが現實なり。

死出の旅路は春の野に、
若葉つみつゝ歌ひてし、
いとしき妹とわれはまた
百度千度遊ぶらむ。

三日月

三日月の、影は落ちけり。
いざゝらば、
妹が庵を訪れて、
眉の三日月ながめてむ。

失戀者の悲歌

愚仙堂主人

かゝる淵瀬に浮き沈み、
悲しき身にもならむとは、
夢にもわれは思ひきや。

戀は樂しきものとき、、
妹は優しき人を見て、
戀せし我は愚ぞかりし。

悲しからずやこの頃は、
猛き男の子の氣も挫け、
悟れる道も失せむとす。

人は歌ひき戀こそは、
てるや春日のあさ日影、
凍れる人のこゝろをも、
跡なく解かすものゝおと。

人はうたひき妹こそは、
咲くや夕の夏のかぜ、
病みて勞れて覺束な、
魂吹き返すものゝこと。

戀は來ぬれど我胸の、
結びし氷とけあへず、
妹は見つれどわがなやみ、
すがくしくば晴れずかし。

戀といふもの何ならむ、
戀せし人や知るならむ。
戀は春日の旭日かげ、
こぼれる胸も解くときく。

戀といふもの何ならむ、
こゝろもさむき秋風の、
憂き身の上を吹き渡る、
悲しきものぞと我は知る。

妹といふもの何ならむ、
戀せし人や知るならむ、
いもは夕の夏の風、
魂吹き返すものときく。

妹といふもの何ならむ。
月夜てる日の影法師、
行く後先につきまとひ、
心まどはすものと知る。

寢覺の床にまぼろしの、
妹が姿を見るときは、
目には涙ぞうかぶなる。

夕の鐘にまぼろしの、
妹が姿の目につけば、
胸も裂けなん許りなり。

わきも子故にかく許り、
愚かの道に迷ふとも、

妹てふ光あるうちは、
たゞ一すぢを辿りてむ。

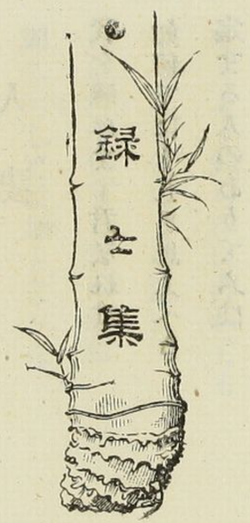
わきも子故にかく許り、
ひとり思をなやませぞ、
そはわきも子の罪ならず、
わが愚かなる故ぞかし。

一目妹子を見るときは、
にはかに心も春めきて、
たのみ難なき浮世さへ、
我がものなりと思はれて、
心もひろくなるものを。

ひもが姿を見ぬときは、

わつき心も結ばれて、
雪も氷もたゞならぬ、
その冷たさを解すてふ、
道のひかりも力なし。

迷へば狂ふ、
わが庭の、
花の香にしも、
たわむるゝ、
胡蝶に狂る似た、
我身かな。
あゝ莊周の、
夢さめなはんは、
いつの時。



緑之集

瀧澤久馬雄

君知るや

見越の松の葉かくれに
あはれゆかしきれんじ窓
ほのかにもるゝ妻琴の
唯何となく戀しくて

亂れこゝろの一筋に
日毎さまよふ君が門
みち邊のさゝせの下蔭に

佇むわれを君知るや

松の風

夕けの烟うちなびき
犬のなくなる遠方の
里はさぎりにかくれつゝ

ふし面白き馬子歌の
山下道に聲きえて
あとは靜けし松の風

人妻

我を戀ひます君なれは
如何でにくしと思ふへき
定まる人のありてふは

とくより知らぬに非ねとも
やさしき君の言の葉に
あはれつれなく答へかね
罪ふかしとは知りながら
うたてや我はあさましき
迷のみちに迷ひ行く
あはれのものと知るや人

里の川

青葉の奥にうすくこく
かやりの烟ほのみえつ
紅雲のうすれゆく
夕の空のしづけさよ

野邊の細みち行く駒の
鈴の音遠く消え行きて
夕露しげき青柳の
かげにうたふや里の川

紅涙

そゝぎ給へよ我胸に
玉にもまさる眼より
清きなみだをあはれ君
あゝ我胸はもゆるなり

秋曉

明はなれゆく窓の外に
殘れる月の影さえて
あくるを惜むこふろぎの

すたく聲さえあはれなり

冬枯

招く尾花は今如何に
清き流の今何處
結ふ氷におく霜に
片山里の冬早く
さゆる嵐ぞ身につしむ

閑吟集

羊子

はかなき夢と知りながら
君が姿を見るときは
なほとゞろくや我心

つれなき君と知りながら
昔の夢を思ひいでて
我はなくなり人てれず

けがれし身とて捨もせず
月は今宵もいさぎよき
光をわれにそゝけるを

なぞはれやらぬ心ぞも

＊　＊　＊　＊　＊

悲しかるへき秋の月
君と見るこそうれしけれ
うれしかるへき春の月
君いまさずばなにかせむ
さらは今宵はふくるとも
語りあかさむ君と我
明日は別れとなるものを

＊　＊　＊　＊　＊

願くは
春の胡蝶に身をなして
紅の
霞に醉ひ花に臥し
うつら〳〵

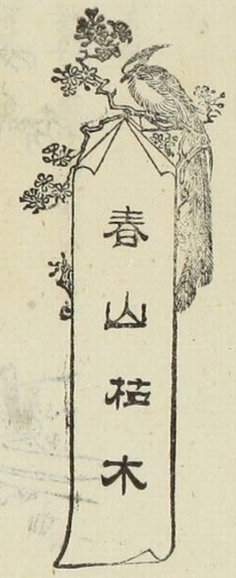
樂しき夢を我は結はむ

願くは
秋の小虫に身をなして
露深き
花野〳〵をゝとづれて
ぬは玉の
夜をしも獨りなきやあかさむ

とてもつれなき世なりけり
とてもかひなき身なりけり

諸共にいざや遊ばむ
荒野原我等を招く
地を蹴て君は起ち舞へ

天を仰き我は歌はむ
君はしも世をいきとほり
人間を我はいかる
起よ起て
荒野原是我故郷



子明

今朝の夢

夢にも君を忘れじよ、
迭に手をば取りかはし、
淺瀨をわたる折しもあれ、
山風さつとおろしきて、
君が姿はたつ波の、
ふかき底にぞかくれける、
たどり〳〵て尋ぬれど、

絶えて姿の見えざれば、
聲をかぎりに呼び叫ぶ、
時しもあれや大浪の、
一度に我をうつと見て、
覺てうれしき今朝の夢。

今日も

今日もひねもす、
昨日もひと日、
君が門へに迷ひてき。
まだ一度も出でまさぬ、
君が姿の戀しさに。

君は誰れ

君に思をこがせども、

迷の霧をおひ拂ふ、
力なきこゝろ恨みなれ。

君を初めて見てしより、
日に增しぬる〻戀衣、
落つる涙の繁くして。

君は何處の誰ならむ、
只面かけを見たるのみ、
家居も夫と知らずして。

君を初めて見そめしは、
實に彼處なり彼處へと、
幾度行きて見つれども。

君に逢はむと幾度か、
神に祈れどかひなきは、
外にも祈る人やある。

程經て後の夜なりけり、
君は夢にもきませしが、
語る間もなく消えましぬ。

そのあくる朝思ひにき、
君も心のあるならむ、
夢にも來ます程なれば。

されば何とて今一度、
彼處へとては來給はぬ、
われ行くとは知りますに。

かばかり君に迷ふ余れ、
かばかり君を戀ふるなり。
夢にも君は知らざるか、

情知る人の世に在らば、
いつしか見たる其折を、
なほ忘れずや尋ねてよ。

ある人の許に

世の人々に捨てられし、
あぢきなき身を君はしも、
いとほしとこそ愛するなれ。

この身も魂も何かせむ、

凡てを君にさゝげても、
君が情に報いてむ。

君と我

戀のさゝ舟安らけく、
君かこゝろの池水に、
浮べてしより身も魂も、
輕くありけりこの月日。

戀ありてこそ君と我、
かくも樂しく日を送れ、
戀なき昔いかなりし、
世を憂きものと嘆ちてき、

二人がなかの悅びは、

二人のほかに誰か知る、
今ぞ歌はんもろともに、
樂しきものと世の中を。

月の影

酒も肴も盡きはてゝ、
巷をとぼるゝまれに、
閨のともし火影暗し。

水も雜らぬ妹脊中、
樂しく語るむつ言を、
誰が羨まぬ者やある。

無心の月と思ひきや、
窓の内より影しのぶ、

羨ましとや思ふらむ。

逸題

坐禪の床に觀ずれば、
人生無情の憾み無く、
花下に酒酌み戯れて、
樂む樣やそれならむ。

人に代りて

かばかり今宵悲しきに、
人にかたれば冷やかに、
きゝ流すこそもの憂れ。

月も出でなばたゝ獨り、
更行く夜半の海の邊に、

ひとり悲く泣きてばや。

我宿へ

かくも勞れしわが足の、
輕く運ぶはなにゆゑぞ、
宿に歸らはわがいもの、
笑めるすかたのあればこそ、
優しきことばあればこそ。

忍戀

海山こそは越えねども、
人目の關を避けて來る、
ひとの心やいかならむ。
軒端にそよぐ風にさへ、

人や知らんとあやぶみて、
やすき心もあらじかし。

心をこめてかたらへど、
うわの空にて聽き流す、
君がこゝろぞ測られず。

恨むといふにあらねど共、
きみが心の冷えたるは、
かへすがへすも悲しけれ。

君しあらずば世の中に、
富も位もなにかせん、
君ありてこそ樂しけれ。

君許さずば止むを得じ、
君が父母にせまりても、
戀しき君を得てましや。

かばかり心におもへ共、
答のなきはなにゆえか、
我を厭ひておはすらん。

今は何をかつゝむべき、
君ゆるさずは世を捨て、
深山のおくに隱れてん。

とは思へ共なか〳〵に、
迷ひの夢の覺めずして、
いよゝふもひをます鏡。

戀の焔よ燃えあがれ、
天をもしのぐ威勢にて、
冷えにし人を温ためよ。

○

忍びて戀をしてあれば、
とても命はつゞくまじ、
人に知られぬ憂きおもひ。

一つにならば如何ばかり、
樂しかるらむ君と我、
誰に憚ることなくて。

小流涓之

重松朋水

をさなご

門邊にむれてをさなごの
よろこび狂ふみる毎に
我はかなしく覺ゆなり

望みたえたる已が身の
何の故とは知らねども
樂しかるべきさまを見れば

そゞろかなしく覺ゆなり

しかりはするな

しかりはするな童を
耳かしましくありとても
しかりはするな童を

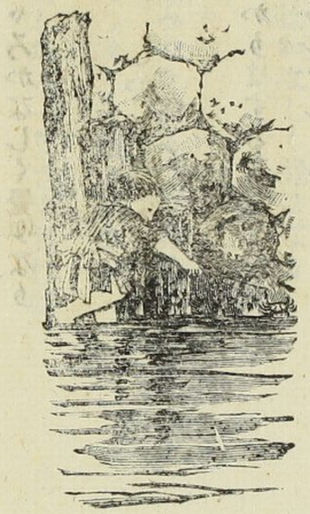
をさなさの一すぢに
親なる君をだゝひとり
いとしく慕ひ來るものを

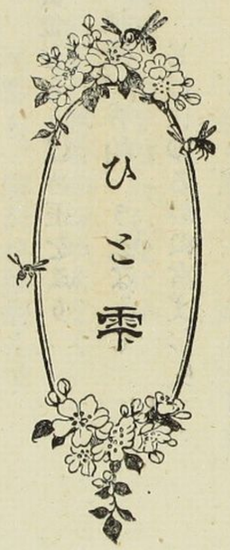
しかりはするな童を
手業の邪魔になればとて
しかりはするな童を

川の水

濁らば濁れ川の水
清みて甲斐ある世ならねば

濁りてともに世の川の
さそうがまゝに流れゆけ
清みて甲斐ある世ならねば





山櫻

桂陵

五百重の峰のやまざくら
浮世のひとにわすられて
ゑしき岩のいはかげに
幾代のはるや占めけむを、
なさけ〻知らぬやま賤の
今日しも此處に辿り來て
明日は代らんと語るなり、
花言はざればなみだなし

詩人がそゞく一片の
あつき同情(なさけ)のなかりせば
千代よろづ代の末かけて
誰れかあはれと吊らはむ。

シオンの月

五風十雨のたがひなく
山には棕櫚のはなさきて
野に麥黍のたけたかし
神のえらみしイスラエル
異邦のかぜは吹かせじな。

黄金をちりばめ玉をゑり
橄欖、香柏、うゑなみて
とはにゆるがぬ宮ばしら
ふとしく建しエルサレム

世は春のみとおもひしに。
鐵馬、南下のあしたには
ありし榮華のゆめもなく
樓落ち、厦折れ殿飛んで
のこる臺下のさざはしを。
てらすシオンの月きよし。

母の思

花散り、水逝き、春去りて
青葉もゆめとすおしつゝ
今は尾の上のもみぢばに
つま戀ふ鹿のかなしきを。
遊子みやこを出でゝより
そよとの風の音だになし
今宵いづこのたびに寢て

夢や我が家にかへるらむ。
ひとり軒端につきを見て
千々にくだくる我が胸の
母がなみだのひとしづく
かけて送らんよしもがな。

昔の戀

花のみやこのくれたけの
根岸のさとのあけくれを
君がなさけのことの葉に
うれしと見しもゆめなれや。
めぐる月日の小ぐるまの
やむときもなく過行けば
我もむかしのわれならで
うきは何處もおなじ世や。

○

振り分け髪のそのむかし
若菜つみてし河の邊の
若菜はいまも萠え出れど
ともにつみにし人はなし
しげるおぼろの下かげを
行く水のみぞさらくと、

萩月

秋虫三首

眠氣して燈を
消さんとせしにきりくす
こほろぎに詩を書す
筆を招にけり
秋蟬のなき暮したる
旅伯かな

子規撰

碧梧桐

湖のほとり稻苅る水の中
星月夜星散るあとのほの白し
新酒提げて鹿に出で逢ふ小道かな
鵙啼いて夕雲早くなりにけり
草の實のもすそにへばりつくは何
掛稻の並木過ぐれば小寺かな　秋竹
雀蛤となる日を下す臺かな
蓮の實の月の夜を飛ぶ思ひかな
玉垣や尾のなき蛇の穴に入る
星合や更けて星飛ぶしきりなり

家主の見まはりに來る野分かな　肋骨
長き夜や按摩昔を語るらく
笊に芋盆に菜黄あり野の小店
山の背に夕霧這ふて里暮るゝ
新しき魚得て歸る蕎麥の花
蕈狩に來よと申しぬ山の僧　杷栗
我庵は柿盗む子もなかりけり
雨の夜の雁啼き過ぐや傘の上
月更けて我家ばかり砧うつ
狸獲て森を出づれば秋の雨
御手洗にこぼれて赤き木の實かな　子規
末枯の森出れば川横はる
朝顔やきのふ死だる小傾城
山雀の來る時は四五羽來りけり
新酒あり馬鹿貝を得つ野の小店

雜録

人來れ詩

戀に悶ゆる人よ、自由に焦るゝ人よ、世を怨む人よ、世を怒る人よ、人間を厭ふ人よ、天を望む人よ、山を戀ふる人よ、野を慕ふ人よ、河を愛する人よ

高歌せよ、長嘯せよ、詩中安慰あり、幽愁の鬼以て拂ふへし、詩中和樂あり、怡靈の神以て迎ふへし

詩人よ來れ、來つて其沸るが如き熱血と溢るゝ如き涙泉とを「一心の緒琴」に向て灑け「心の緒琴」幸くは卿等と生死を共にせむ

我黨の士に寄す

秋には秋の色あり、春には春の眺あり、月の清瓏なる花之を妬ます、花の艶麗なる、月之を羨

ます、月や花や共に自ら恃むところあれはなり、我黨の士よ、願くは自信あれ、自重せよ、徒らに他山の花、別天の月を羨むとなかれ、人各天に稟るところあり、彼に特調あらば我に特技なかるへからず、我に特技あるを自覺して貞く之を守るは則ち天職を全ふするなり、詩に忠なるなり、吾人は何等の主張もなく、何等の特色もなき摸作詩人を賤しむものなり、

悲歌するもよし、慨歎するもよし、世は廣し人には自由意志あるものをや、然れとも、我黨の士よ、願くは、至誠なれ、眞面目なれ、虚僞の涙を垂すなかれ、虚僞の怒を發するなかれ、虚僞の思を抒ふるなかれ、これ世を欺き己れを欺くのみならす、詩の神聖を、汚すものなれはなり

社友の寄稿に就て

本社社友の寄贈せらるゝ、製作撿閲の業は擧げて之を韻文界の泰斗宮崎湖處子先生に屬し先生の點評撰擇を徑て之を誌上に掲載す、茲を以て本社の鹵茨杜撰の責を免るべきのみならず作者

たるものに足り、適從する興味を以て他と特異

新体

湖處

人或は新体功如何を免るか、成功日文界の成功せざる嘗て西歐の感情の鋭の士は式に於て漢詩りき。然の新詩想れ新たなる

式をとり最も好適する能はりて新詩に、其必果然彼等一派の如新感情べからず故に吾人革せざる功せざる新國民新て新國民ことを得

廣

青年韻文

僅かに一月の長あるの故を以て、敢て其玉稿を示し、添削を乞はるゝ向不尠。其都度諸彦の熱心に撼かされ、爲に煩を憚からず、一一加筆之上、返稿の勞に服し、以て斯道に對する素志の萬分一を盡し居候處、今回三友社の屬托に應し、韻文見閲方引受候に付、特殊の御依頼は此際一切謝絶仕候。有志の諸彦は、宜しく其製作を以て同社へ托さるゝ候。

鷄歳仲秋　湖處子敬白

○

本誌は次號より四六版の横袋に改め、紙質は最上を撰むべし

國木田哲夫、太田玉茗両君の句像を掲げ、尚毎號木版畫を挿入し、ふるとあるいは詩中人の寫眞を深む

新体詩人の寫眞板句像

一本誌は毎月十五日を以て發行す

一本誌は毎月十五日を以て發行すべし

一本誌は毎月十五日を以て發行すべし

一本誌は毎月十五日を以て發行すべし

社告

一、本集は創立の際に万事に注意行き届かず、粗漏不整頓の罪を負かれ、次集よりは材料を益々精撰し特に社友の寄稿は別欄に記するが如く**宮崎先生**の撰擇點評を仰いてこれを掲載する事に決したり

一、次集より雜錄欄には、社員の外に**大町桂月先生**得意の健筆を揮て、詩界の出來事を評論せらる可し

一、次集より新体詩人の名家を訪問して其抱負、意見等を叩いて、遂號之を紙上に記載す可し

◉雜報　寄稿歌謡詩論記事　平野萬里　人生論　武目生論　次集より
◉雜報　寄稿歌謡詩論記事　徒然草　北海道　合同教會　谷口生　田中生　内村生　宮崎生　石川生　心

基督教新聞

第七百三十五號
本月十七日發行

◉家庭　欠くまじきもの　はまち
◉文苑　祝婚の歌　一郎
◉小報　デーナ博士の死去　朝鮮仁川聖書學會
◉雜報　十件
◉江湖雜報　十件
◉廣告數件

發行所　東京市京橋區出雲町一番地　基督教新聞社

毎土曜日發行

少年新聞

一枚は一錢
十枚金九錢

◎少年新聞は……少年諸君の道德心を養成せしむることを目的とする新聞也
◎少年新聞は……少年諸君の智識を發達せしむることを目的とする新聞也
◎少年新聞は……一面白き月ケ月の分繪の入の代新金閑閑なり
◎少年新聞は……日一面白曜ケ日月き繪の代新金閑閑なり
◎少年新聞は……丸月子少理面白曜ケ日月き繪の代新金閑閑なり
◎少年新聞は……四供年化學き日月き繪の代新金閑閑なり
◎少年新聞は……日は諸學き日月き繪の代新金閑閑なり
◎少年新聞は……第勿君態書の分繪の代新金閑閑なり
◎少年新聞は……二論の用さ前の分繪の代新金閑閑なり
◎少年新聞は……號教作のが奇し日金閑閑なり
◎少年新聞は……號同に奇り奇し日金閑閑なり
◎少年新聞は……神は首り奇し日金閑閑なり
◎少年新聞は……田十注る若く出かるに金閑閑なり
◎少年新聞は……五一意論くはるに金閑閑なり
◎少年新聞は……軒町一番地は文說面ポンチ白き閑四錢なり

第一號は同十日第三號は同十日第四號は同十日發行

發行所　少年新聞社

各地繪双紙屋學校用品店雜誌店等にあり

一本誌は毎月一回廿五日發行す
一本誌の代價は一部前金拾錢にして部數に依りて割引を爲さず
一本誌の廣告料は一行拾五錢、一頁五圓と定む
特別廣告は、其都度御相談に及ぶべし
一本社への爲換は本郷局宛、受取人は三友社を御記入ありたし郵券代用は一割半增と定む
一本誌原稿〆切は十五日限とす

明治卅年十月二日　印刷
明治卅年十月三日　發行

發行兼印刷人　東京市麹町區永田町二丁目二十九番地　宮崎美技男
編輯人　東京市本郷區春木町二丁目二十三番地　石橋哲次郎
印刷所　東京市芝區烏森町二番地　堀内活版所

發賣所
本郷區元富士町　田中屋書店
神田區表神保町　東京堂
京橋區銀座　文海堂支店